

紅葉山文庫における幕府文書の管理

—「御朱印写」を事例として—

高 橋 喜 子

【要 旨】

一般に将軍家あるいは幕府の図書館として知られている紅葉山文庫は、書物だけでなく、幕府が作成した文書や記録類（幕府文書）も管理していた。本稿は、文庫で保管されていた幕府文書の一つである「御朱印写」（領知宛行状の写）に着目して、幕府文書の管理体制を明らかにしようと試みるものである。紅葉山文庫の研究は戦前から行われており、先行研究によって文庫の沿革や活動状況は概ね明らかにされたものの、書物の管理に大きな関心が払われ、文書の管理についてはほとんど注目されてこなかった。本稿では、「御朱印写」の櫓への移管と風干を題材に、文庫における幕府文書の管理実態を検討した。主な使用史料は、書物奉行の職務日記として知られる「御書物方日記」である。

研究の結果、「御朱印写」の文庫への預入および文庫から櫓への移管の過程、風干の方法、文書に対する当時の認識等が詳らになった。また、検討を通して、「御朱印写」は文庫内の他の資料に比べ、極めて特殊な扱いを受ける文書群であったことも明らかとなった。紅葉山文庫が幕府の文書管理にどのように関わっていたのか、文庫の文書管理機能の一端を示すことができた。

【目 次】

はじめに

1. 書物方預かりの幕府文書
2. 「御朱印写」の櫓への移管
3. 「御朱印写」の風干と書物方の権限

おわりに

はじめに

本稿では、紅葉山文庫における幕府文書の管理について論じたい。紅葉山文庫は、江戸城内に設置された幕府の文庫であり、慶長7年（1602）に徳川家康が江戸城本丸南端の富士見の亭に建てた文庫がその前身である。寛永10年（1633）、文庫を管理する役職として書物奉行が設置され、同16年（1639）には歴代将軍の霊廟があった江戸城内の紅葉山に、蔵書を納める建物が新築された。紅葉山文庫は一般に将軍家あるいは幕府の図書館といわれ、幕府が収集した書物を保存・管理していた施設として知られている。しかし、文庫では書物だけではなく、幕府が作成した文書や記録類（以下、「幕府文書」と称す）も管理していた。本稿ではそうした幕

府文書に注目して検討を行う。主に使用する史料は、書物奉行の職務日記として知られる「御書物方日記」である¹⁾。

紅葉山文庫や書物奉行については、すでに戦前から研究が行われており、代表的なものとしては樋口龍太郎氏、市島謙吉氏、森潤三郎氏、福井保氏の研究が挙げられる²⁾。彼らの研究によって、紅葉山文庫の沿革や活動状況などは概ね明らかにされた。しかし、紅葉山文庫は図書館という観点から研究される傾向にあったことから、書物の管理が注目され、文書の管理については十分に検討されてこなかった。ただし、文庫に幕府記録類が保管されていたという事実は福井氏によって早くから指摘されている³⁾。近年、幕府が作成した文書や記録類(幕府文書)の存在も広く認識され始め、この点を踏まえて、紅葉山文庫について「図書館という用語は馴染まない」⁴⁾、あるいは「公文書館ともいえる性格を兼ねていた」⁵⁾という意見も出されている。また、史料保存運動の高まりの中から「文書管理史」研究の重要性が指摘され⁶⁾、1990年代以降、大友一雄氏、大石学氏らにより幕府の文書管理研究も進められている⁷⁾。紅葉山文庫の文書管理機能についても、大友氏により若干の検討が行われており、「所領給付の書状の写し」(御朱印写)の管理がシステム化されていたことが指摘されている⁸⁾。しかし、具体的な管理状況は明らかにされていないというのが現状である。本稿では、先学の研究手法に学びながら、紅葉山文庫に保管されていた幕府文書、特に「御朱印写」(領知宛行状の写)に着目して、文庫内での幕府文書の管理状況を検討する。これにより、従来あまり知られていなかった、紅葉山文庫における幕府文書の管理体制の一端を明らかにしたいと考えている。

- 1) 「御書物方日記」(一部の表題は「御書物方留牒」)は、欠本があるものの、宝永3年(1706)から安政4年(1857)までのものが現存しており、国立公文書館内閣文庫に所蔵されている。宝永3年(1706)から延享2年(1745)までは史料の翻刻が行われており、「幕府書物方日記」として東京大学出版会から刊行されている。現在、国立公文書館デジタルアーカイブ〈<http://www.digital.archives.go.jp/>〉において日記の全文が公開されている。
- 2) 樋口龍太郎「紅葉山文庫物語」(上)(中)(下)(余録)、『図書館雑誌』通号78・79・81・83、1926年4月・5月・7月・10月)、市島謙吉「幕府蔵書は如何に取扱はれたか」(『図書館雑誌』通号143、1931年10月)、森潤三郎「紅葉山文庫と書物奉行」(昭和書房、1933年〈複製版：臨川書店、1978年〉)、福井保「紅葉山文庫」(郷学舎、1980年)。
- 3) 福井保「紅葉山文庫」(郷学舎、1980年)、同「江戸幕府の記録類」(同『日本書誌学体系 12 内閣文庫書誌の研究』青裳堂書店、1980年)。
- 4) 藤實久美子「紅葉山文庫の管理と書物師出雲寺家」(同『近世書籍文化論 史料論的アプローチ』吉川弘文館、2006年、169頁)。
- 5) 大和田順子「江戸城内の將軍家図書館—紅葉山文庫と書物奉行」(宮城県図書館編『叡智の杜』第6号、2009年3月、36頁)。
- 6) 安藤正人「近世・近代地方文書研究と整理論の課題—「文書館学」の立場から—」(『日本史研究』280号、1985年12月)。
- 7) 大友一雄「幕府寺社奉行と文書管理」(高木俊輔、渡辺浩一編著『日本近世史料科学研究』北海道大学図書刊行会、2000年)、同「江戸幕府と情報管理」(臨川書店、2003年)、同「幕府奏者番にみる江戸時代の情報管理」(『史料館研究紀要』第35号、2004年3月)、同「天保期における老中職公用方役人と情報管理—老中日記の作成と収集—」(関東近世史研究会編『関東近世史研究論集3 幕政・藩政』岩田書院、2012年)、大石学「日本近世国家における公文書管理—享保の改革を中心に—」(歴史人類学会編『国民国家とアーカイブズ』日本図書センター、1999年)等。
- 8) 大友一雄「江戸幕府における記録管理・アーカイブズ・歴史叙述」(渡辺浩一編『「歴史的アーカイブズ」の多国間比較に関する研究』研究成果年次報告書平成19年度〈平成16~19年度科学研究費補助金 基礎研究(A)【課題番号 16202013】〉、2008年2月)。

1. 書物方預かりの幕府文書

前述したように、文庫では漢籍などの書物の他、幕府が作成した文書や記録類（幕府文書）も多数保管していた。具体的には、『元治増補御書籍目録』の区分において、「御家部」と「封印物之部」に分類される資料が幕府文書である。幕府文書はその管理のあり方で2種類に分けることができると考えている。1つは（A）「書物奉行が風干や封印を扱えるもの」（御家部）、もう1つは（B）「書物奉行が風干や封印を扱えないもの」（封印物之部）である。なお、風干は曝涼のことであり⁹⁾、封印は紙に封印者の署名などを記し、その紙を、文書の入った長持や文書箱に貼り付ける、もしくは結びつける状態であったと推測される¹⁰⁾。（A）は、風干の指示、文書を入れた箱や長持への封印、およびその開封等を、書物奉行が取り扱える文書である。一方（B）は、書物奉行に風干や封印を取り扱う権限が存在せず、許可が下りない限りは中身の確認は勿論のこと、風干さえ行えない文書である。（A）の例としては国絵図、朝鮮・琉球との外交文書、日光社参関係書類等が挙げられ、（B）の例としては領知宛行状の写（御朱印写）、武家諸法度（御条目御法令）、右筆方の書類、屋敷改帳等が挙げられる。ただし、この2つの区分は絶対的なものではなく、どちらに含まれる文書なのかは、時代により変化がある。本稿で着目する「御朱印写」（領知宛行状の写）は、後者（B）の「書物奉行が風干や封印を扱えないもの」に該当する¹¹⁾。ここでは検討の前提として、「御朱印写」の属する（B）の文書の概要について、史料を提示しながら解説しておく。

次に挙げる史料は、書物方で預かっている幕府文書の内訳を示すものである。なお、「書物方」は書物奉行と同心を含む文庫の管理組織全体を指し、「書物奉行」は奉行の地位にあるものを示す。

御書物方江御預りニ罷成候品

御朱印御長持

下ヶ札

四五年二壺度宛、私共伺之上、奥御祐筆懸合、御数寄屋ニ而御風干御座候、前々ヨリ私共御預りニて御座候、

御右筆御長持

下札

是ハ預り候迄ニ而、錠おろし封印御座候、鍵此方ニ無御座候、尤、御風干之御沙汰も無御座候、

私方御納戸御長持 右同断

屋敷改御帳面箱

下ヶ札

毎年八月十七日、屋敷改より、御箱受取申度書付、御老中方江差上、私共御下ヶ、

9) 虫やカビを防ぐため、書物などを日干したり、風にあてたりすること。虫干、風入などともいう。

10) 当時の文書の封印のあり方については、大友一雄氏が寺社奉行の文書管理との関連で検討している（大友一雄『江戸幕府と情報管理』臨川書店、2003年）。

11) ただし、享保20年（1735）以前は、書物奉行が風干や封印を行う場合もあった。この点については後述する。

奉り付仕返上之上、御箱於中之口相渡申候、同廿一日返上之節も、前日、御書付御下ヶ、奉り付返上仕、受取申候、尤、御箱并鍵封シ候而、預り置申候迄ニ御座候、右之通、従前々御預りニ罷成候、

不時ニ御封印付二而、御預り申候儀も御座候、是者当年茂日光御社参前、御法令被仰出有之節、右御箱御封印二而、遠江守殿御渡被成、御預り申候、還御已後、伺之上、返上仕候、

□□□□ □□、以上、
(蔵 根)

請書

七月廿二日

本郷与三右衛門¹²⁾

これは「御書物方日記」の安永5年(1776)7月22日の記事である。この日の前日21日、目付から書物奉行宛に来書があり、預かっている書物のほか、古い日記類や他の役所の書留・帳面等、書物奉行預かりになった品があるかどうか、報告を求められた。それにつき書物奉行は、そうした文書がある旨を回答している¹³⁾。翌22日、この件に関し、再度目付から問い合わせがあり、その際に提出した書付が上記に挙げた史料である。

これによると、書物方が預かっている品は、①御朱印御長持、②御右筆御長持、③払方御納戸御長持、④屋敷改御帳面箱の4点があり、このほか不時に預かる文書もあるという。①御朱印御長持は、正確には御朱印写入御長持といい、主に將軍の代替わりの際に大名、公家、寺社にそれぞれ発給される判物・朱印状(領知宛行状)の写が入った長持のことである。その下げ札には、4、5年に1度ずつ伺を立て、奥右筆と交渉し、数寄屋で風干を行っている旨が記されている。②御右筆御長持および③払方御納戸御長持は、鍵をかけた状態で預かっており、鍵は書物方で管理しておらず、風干もしていないという。④屋敷改御帳面箱は、毎年8月17日に屋敷改に渡し、同21日に返却となる書類で、箱には鍵がかけてあり、書物方では箱を預かっているだけのようである¹⁴⁾。史料に記された書物方預かりの文書は4点だけだが、ここに記されているものがすべてではなく、これ以外にも「御条目御法令」(武家諸法度)なども文庫に預けられていたことがわかっている。

史料から読み取れるように、書物方が他所から預かっている文書は、文書によって取り扱いが多少異なっていた。中でも本稿で取り上げる①御朱印御長持の特徴は、書物方から風干の伺を行うという点であろう。このような取り扱いがなされる幕府文書は、「御朱印写」と「御条目御法令」(武家諸法度)以外には見当たらない。

元治元年(1864)に増補された文庫の目録である『元治増補御書籍目録』には、御家部の末尾に付された外品目録に、次のような記載がある。

封印物之部

御代々御法令 御老中封印	一箱
御朱印写入御長持 同上	十一棹
梵鐘鑄換之官符 同上	一箱

12) 「御書物方日記」安永5年(1776)7月22日条(国立公文書館内閣文庫所蔵)。史料中の遠江守は若年寄・加納久堅、本郷与三右衛門は書物奉行。

13) 「御書物方日記」安永5年(1776)7月21日条。

14) 「御書物方日記」の毎年8月17日と21日の記事をみると、記載の通り、屋敷改御帳面箱の差上と返上が行われていることがわかる。

御黒印并下知状 同上	一箱
御城内分割総図 同上	一箱
異国條約書入御長持 同上	三棹
屋敷改帳入長持 屋敷改封印	二棹 ¹⁵⁾

元治元年の時点では、上記のような文書が文庫に保管されていたことがわかる。封印物とは、文書が長持や箱に入れられ封印されたまま、文庫内に保管されていた文書類であり、許可がない限りは、これらの文書類は書物方で中身を見ることはできなかった。史料にある「御代々御法令」は武家諸法度である。「御朱印写入御長持」は、前述の史料にも記載のあった、領知宛行状の写の入った長持のことである。この他、黒印状や下知状、城内の絵図、異国条約関係書類、屋敷改帳なども存在していた。

紅葉山文庫の目録は江戸時代を通して10回以上、増補や改正が行われているが、封印物之部が存在するのは、『元治増補御書籍目録』のみと考えられる。『元治増補御書籍目録』御家部の凡例の記載によると、一つ前の目録である『重訂御書籍目録』（文化11年〈1814〉～天保7年〈1836〉）を編纂した際には、封印物は掲載しなかったとある¹⁶⁾。おそらく『重訂御書籍目録』以前は、封印物之部（他所から預かっている文書）は目録に掲載しなかったのであろう。これについては、大友氏も同様に指摘している¹⁷⁾。

このように紅葉山文庫には多数の幕府文書が存在していたが、本稿では中でも領知宛行状の写である「御朱印写」に注目して文庫での管理のあり方を検討していく。領知宛行状は知行を安堵する文書であり、将軍との主従関係、支配関係を明らかにするとともに、受給者からすれば自らの正当性（正統性）を証明する文書である。武家社会のみならず、近世社会において、極めて重要な文書といえる。その文書をどのように認識し取り扱うかは、写の管理に対しても反映される。また、例えば「御条目御法令」（武家諸法度）は歴代将軍のものが一箱に収められているのに対し、「御朱印写」（領知宛行状の写）は、各将軍ごとに長持群が存在するため、時代の変化や各将軍間での変化などもみることできる。文庫に保管された幕府文書の中でも興味深い事例を提供するものであるため、本稿ではその管理のあり方について具体的に取り上げたい。

検討に入るにあたり、御朱印写について、改めて説明を加えておく。御朱印写とは、領知判物・朱印状の写、いわゆる領知宛行状の写のことである。江戸幕府では主に将軍の代替わりごとに大名、公家、寺社に対して領知宛行状を新たに発給しており¹⁸⁾、その写（御朱印写）を作成し保管していた。そして発給後一定期間が経過すると、写の入った長持が文庫に預けられるという仕組みであった。「御書物方日記」では、領知宛行状発給時あるいは写の預入時の元号

15) 小川武彦・金井康編『書誌書目シリーズ16 徳川幕府蔵書目 第7巻』（ゆまに書房、1985年、65頁）。なお、『元治増補御書籍目録』の写本が国立公文書館に、清書本が宮内庁書陵部に所蔵されている。伝来の背景等について詳しくは、中村一紀「宮内庁書陵部所蔵『楓山文庫御書籍目録』について」（『日本歴史』715号、2007年12月）を参照されたい。

16) 小川武彦・金井康編『書誌書目シリーズ16 徳川幕府蔵書目 第7巻』（ゆまに書房、1985年、11～12頁）。

17) 註8参照。

18) ただし、7代家継と15代慶喜は在任期間が短かったため、領知宛行状は発給されていない。また公家、寺社に対しては発給されていない場合もある。

を冠して、「〇〇(度)御朱印写入御長持」などと表現されている。また、領知宛行状の発給時期には、発給事務の参考とするためか、文庫から借出が行われ、利用が済むと返却されている¹⁹⁾。文庫では4代將軍家綱以後の御朱印写を保管していた²⁰⁾。

幕府は新たな將軍が就任すると、領知宛行状の発給手続きを進める(朱印改め)。その際、受給者は歴代將軍の領知宛行状の原本とその写等、各種書類を幕府に提出することが、先学の研究によって明らかにされている(原本は後日所有者へ返還、写は幕府が受取)²¹⁾。ただし、受給者から提出された領知宛行状の写と、今回取り上げる紅葉山文庫に保管された御朱印写は別物であり、文庫保管の御朱印写は幕府が作成した領知宛行状の写と考えられる。

なお、御朱印写が収納された「御朱印写入御長持」には、幕府が作成した領知宛行状の写のほか、大名等の受給者から提出された書類も含むとも考えられるが確証はない。藤實氏は「紅葉山文庫には、「改め」時に幕府に引き上げられた大名家からの提出書類は、管見の限り、収納されていない」としている²²⁾。しかし、少なくとも四代家綱と五代綱吉に関しては、「御朱印写入御長持」の中に、写のほか、大名から提出された書類が含まれていた²³⁾。従って、6代家宣以降の歴代將軍分についても、幕府が作成した写とともに、受給者からの提出書類が長持内に含まれていた可能性は否定できない。ただし、本稿では幕府文書の管理体制を明らかにすることに主眼を置くため、この点を深く追及することはせず、幕府作成の「御朱印写」に注目して検討を進める。

2. 「御朱印写」の櫓への移管

ここでは、御朱印写の櫓への移管について、その事務手続きの過程を追ってみたい。御朱印写入御長持を櫓へ移管していたという事実は、すでに福井保氏、藤實久美子氏により指摘されている²⁴⁾。しかし、福井、藤實両氏も含め、その手続き過程を具体的に検討した研究は存在しない。本節では、櫓への移管の手続き過程を明らかにするとともに、古くなった御朱印写に対する認識や扱いについて検討する。これによって、作成後一定期間を経た文書はどのような管理体制のもとに置かれるのか、具体的に明らかにしていきたい。

19) 正確には、文庫内の書物や文書を貸し出す場合は「差上」、返却は「御下ヶ」などと表現する。

20) 管見の限り、初代家康から3代家光までの御朱印写は、文庫には保管されていない。また、領知宛行状の発給がなかった場合には、当然のことながら写も作成されていない。

21) 石井良助「大名の御代替朱印改について―棚倉藩の場合―」(牧健二博士米寿記念論集刊行会編『牧健二博士米寿記念 日本法制史論集』思文閣出版、1980年)、藤實久美子「江戸時代中後期の「判物・朱印改め」について」(『学習院大学史料館紀要』第12号、2003年3月)。

22) 藤實久美子「領知判物・朱印への史料空間論的アプローチに関する覚書―「改め」とその後―」(『岡山藩研究』第46号、2004年6月、5頁)。

23) 東京大学史料編纂所編『幕府書物方日記 2』(東京大学出版会、1965年)、享保元年(1716)10月28日条。以下、『幕府書物方日記』とのみ記す。

24) 福井保「紅葉山文庫」(郷学舎、1980年、15頁)、藤實久美子「紅葉山文庫の管理と書物師出雲寺家」(同『近世書籍文化論 史料論的アプローチ』吉川弘文館、2006年、174頁)。

表1 御朱印写入御長持の櫓への移管に伴う事務手続きの過程

年	月	日	内 容
寛延2 (1749)	5	22	近年、書物が多くなり、蔵に保存できる場所がないので、古い御朱印写について、別の場所へ移したい旨の伺書を佐渡守（若年寄・板倉勝清）へ提出。
	6	9	若年寄より許可が下りる。御朱印写は目付へ引き渡すよう指示があり、目付方の担当は中山五郎左衛門となる。
	6	10	御朱印写を入れた長持の封印について、奥右筆組頭山中新八郎と対談したところ、長持に施された老中と寺社奉行の封印はそのままにし、長持に「誰殿封印」と封印者の名を書きつけ、その上に書物奉行が封印して目付に引き渡すよう、指示される。
	6	12	引渡予定の御朱印写入御長持8棹について、書物奉行の連印をもって封印する。
	6	18	目付中山五郎左衛門と対談し、期日や持人の人数等、引き渡しの詳細が決まる。期日は明後20日5時半（午前9時頃）となる。
	6	20	朝5時半、御朱印写入御長持8棹を中ノ口まで持っていく。目付中山五郎左衛門に書付を提出し、長持を引き渡す。その際、五郎左衛門から請取書が渡される。請取書には平川口渡御櫓へ納めた旨が記されている。そして引き渡し終了後、佐渡守へその旨を伝える。
明和4 (1767)	2	2	蔵に保存できる場所がないため、享保延享御朱印写入御長持12棹を、平川口渡御櫓へ納めたい旨の伺書を信濃守（若年寄・小出英持（英智））に提出。同日、信濃守より許可が下りる。
	2	9	目付室賀源七郎と対談し、明後11日に引き渡しと決まる。
	2	10	引渡予定の享保延享御朱印写入御長持12棹に張り紙をつける。封印は翌日行うことになる。
	2	11	朝5時半（午前9時頃）、御朱印写入御長持12棹を中ノ口まで持っていく、当番目付の新庄織部と面談する。書付を提出し、長持を引き渡す。その後、引き渡した旨を信濃守へ伝える。
寛政2 (1790)	6	10	明日11日に伺書を提出する旨を目付井上図書へ打診し、了解を得る。
	6	11	蔵に保存できる場所がないので、宝暦度御朱印写入御長持7棹を、平川口渡御櫓へ納めたい旨の伺書を大膳亮（若年寄・青山幸完）に提出。
	6	18	大膳亮より許可が下りる。
	6	19	目付神保喜内と面談し、引き渡し期日は明後21日と決まる。
	6	21	宝暦度御朱印写入御長持7棹を中ノ口まで持っていく、目付神保喜内と面談する。書付の提出とともに長持を引き渡す。その後、大膳亮へ書付をもって報告する。この時提出した書付には、書物奉行の連印で長持を封印したことが記されている。

「御書物方日記」より作成。人名については、「日本史総覧」、「柳営補任」等を参考に補った。

表1は、御朱印写入御長持の櫓への移管に伴う事務手続きの過程をまとめたものである。御朱印写の櫓への移管は、江戸時代中期以降、寛延2年（1749）、明和4年（1767）、寛政2年（1790）の3回にわたり行われていたことが確認できる。寛政2年以降の事例は現時点では未確認だが、移管はその後も行われていたと推測される。ただし、近世後期の「御書物方日記」は欠本が多く、移管がなされていたとしても事実を確認できない可能性も高い。最初の移管は寛延2年として間違いなく、以降の移管の手続きは寛延2年の移管を先例として、それに準じた形で行われている。そのため今回は代表例として、寛延2年の移管手続きを詳細に検討することにし、それ以降の移管に関しては必要により適宜史料を紹介するのみとしたい。

さて、ここで事務手続きの過程について予めまとめておく。寛延2年（1749）、明和4年（1767）、寛政2年（1790）、それぞれの櫓への移管の過程について史料をみていくと、次のような流れがあることがわかる。

- ①若年寄に移管を上申
- ②若年寄から許可が下りる
- ③具体的な手順について目付と相談
- ④目付へ引き渡す(この後、目付方により櫓へ移管される)
- ⑤若年寄へ引き渡した旨を報告

また、②若年寄の許可が下りた後、④目付へ引き渡すまでの間に、書物奉行全員の連印をもって長持を封印する作業がある。以上の過程を踏まえた上で、寛延2年(1749)の移管の検討に入りたい。まず初めに、移管の伺を提出した、寛延2年5月22日の史料を提示する。

一、御蔵近年御書物数多ニ罷成、余席無御座候処、此節、御朱印写御長持追々都合六棹、御預ケ可罷成旨、井上遠江守被申聞候間、同役中相談之上、御蔵余席無御座候ニ付、古キ御朱印写御長持八棹、外場所江被差置候様ニ仕度趣之伺書、今日、佐渡守殿江休益を以差出し候、伺書案右号ニ入置、

右書付差出し候ニ付、奥御右筆組頭山中新八郎江対談いたし置候、²⁵⁾

史料によれば、この節、御朱印写御長持全部で6棹が文庫に預けられることになったが、近年、蔵の書物が多く、保管場所に余裕がないため、同役中で相談の上、古い御朱印写御長持8棹を他の場所へ移したいという旨の伺書を佐渡守(若年寄・板倉勝清)に提出した。史料中の追々預けられることになった御朱印写御長持6棹は、9代將軍家重のものである。同年の日記を確認すると、4月、5月、11月の3回に分けて、延享御朱印写入御長持が預けられている²⁶⁾。家重の領知宛行状の印知年月日は、大名領が延享3年(1746)10月11日、公家領および寺社領が延享4年(1747)8月11日であることから、領知宛行状発給後、2～3年で文庫に預けられていることがわかる。印知年月日は領知宛行状に記された年月日のことである。実際に受給者へ下賜する日は、文書に記された印知年月日と同日、もしくは後日になる。受給者によって下賜日は異なり、下賜日を基準にすると煩雑になることから、本稿では領知宛行状に記された印知年月日を基準に、発給から文庫へ預けられる期間を算出する。

次に、若年寄から許可が下りた同年6月9日の記事を挙げる。

一、御目付中より来書、先月廿二日、佐渡守殿差上置候伺書、今日伊予守殿より御下ケ被成、承付仕差上候様被仰渡候由、則、承付之趣、付札ニ而被差越、此通於付書ニ相認、差越し可申旨、即刻右案之通相認差上候、後刻五平次御目付中江承節二、御殿江罷出、横田十郎兵衛江右之段承候処、日限未相知申候間、相知候ハ、案内可被致旨被申聞候、尤、掛りハ中山五郎左衛門之由候、伺書奉り付札左之通、

(付箋) 御朱印御長持壹件

書面之

御朱印御長持八棹、錠前私共封印仕、御目付江相渡可申旨被仰渡、奉畏候、以上、

25) 「御書物方日記」寛延2年(1749)5月22日条。史料中の井上遠江守は奏者番・井上正敦。

26) 寛延2年(1749)4月21日に、「延享三年万石以上御朱印御長持壹棹」が書物方の管理する蔵に移管されており、その後、同年5月7日には「堂上方御朱印写御長持壹棹」が預けられている。さらに同年11月10日には「寺社領御判物御朱印写入御長持四棹」が預けられている(「御書物方日記」)。そして、延享年間に領知宛行状を発給したのは9代家重であるため、この御朱印写は家重のものと推察される。

六月九日 御書物奉行²⁷⁾

これによると、先月5月22日に若年寄に提出した伺書が受理されたことがわかる。奉り付には、御朱印写御長持8棹について、錠前を書物奉行が封印の上、目付へ引き渡すよう指示され、それを承知した旨が記されている。

そしてこの翌日6月10日には、移管手続きを進めるにあたり、御朱印写入御長持の封印について、書物奉行から目付へ相談がなされた。その史料を次に挙げる。

- 一、御朱印写入御長持之義、昨日御目付中より伊予守殿被仰渡候趣、伺書ニ奉り付仕差越候様ニ申来候間、詰番治大夫奉り付仕、伺書御目付へ返し申候、右長持ハ御老中并寺社奉行衆之封印与覚申候間、今朝、源次郎令吟味、書付相認、兩人御殿江罷出、御目付中山五郎左衛門・横田十郎兵衛江新兵衛致対談候へハ、此義奥御右筆与頭山中新八郎より御目付江申聞候間、新八江対談可然由被申聞候ニ付、早速、新八江申達し候、寛文以来正徳迄之八棹、御老中寺社奉行衆封印之次第書付見セ申候へハ、是ハ伺可申由ニ而、佐渡守殿江被申上候以後被申聞候ハ、佐渡守殿被仰候ハ、御老中方寺社奉行衆封印ハ其俣差置、御長持ニ誰殿封印ト申義書付、其上ニ御書物方封印仕、御目付江相渡可申候、尤相模守殿江も御相談之上、右之通ニ候由、将又、伺書之奉り付者昨日之通りニ而相済可申由ニ付、中山氏へ可申達之处、退出ニ付、当番御目付八木十三郎江対談、奉り付ハ昨日之通りニ而相済申候間、御勝手次第御差上可被成候、委細之義ハ、明後十二日罷出、中山氏へ可申達候間申置候、²⁸⁾

ここで大きな問題となっているのが、御朱印写入御長持は、老中や寺社奉行衆によって封印されており、その取扱いをどうするのか、ということである。傍線部の若年寄・板倉佐渡守の回答によれば、老中や寺社奉行衆の封印はそのままにし、長持に「誰殿封印」と書き記す。その上で「書物方」（書物奉行）が封印し、目付へ引き渡すよう指示されている。

さて、この時の封印に関する指示を踏まえて、同月12日には、御朱印写入御長持を書物奉行の連印をもって封印したとの記事が記されている。

- 一、御朱印写入御長持八棹、御目付中江相渡候分、今日致吟味、同役連印を以、御封印之上、包之、²⁹⁾

この6日後の同月18日、目付の中山五郎左衛門と対談し、期日や持人の人数等、引き渡しの詳細が決まる。

- 一、今日、中山五郎左衛門対談いたし候、御長持揃置候由申候得ハ、明後廿日五半時、請取可申由被申候、持人ハあの方より廿四人差越可申候間、四棹宛両度ニ為持候様ニ被申候、右之趣、頼母江申遣候、尤、頼母・新兵衛、其節罷出候、
但、源次郎・五平次方江も、御蔵五半時前揃之由申遣候、³⁰⁾

27) 「御書物方日記」寛延2年（1749）6月9日条。史料中の佐渡守は若年寄・板倉勝清、伊予守は若年寄・本多忠統、五平次は書物行・大岡五平次、横田十郎兵衛と中山五郎左衛門はともに目付。

28) 「御書物方日記」寛延2年（1749）6月10日条。史料中の治大夫は小田切治大夫、源次郎は近藤源次郎、新兵衛は深見新兵衛、3人とも書物奉行。相模守是老中・堀田正亮。傍線は筆者が付した。

29) 「御書物方日記」寛延2年（1749）6月12日条。

30) 「御書物方日記」寛延2年（1749）6月18日条。頼母は川口頼母、新兵衛は深見新兵衛、源次郎は近藤源次郎、五平次は大岡五平次、4人とも書物奉行である。

これによれば、引き渡し期日は明後20日5時半時(午前9時頃)、持ち人(長持を運ぶ人)は目付方より24人派遣されるという。

そして、引き渡しの期日の当日20日の記事が次に挙げる史料である。

一、一昨日、御目付中山五郎左衛門江致対談候通、今朝五半時、御朱印御長持、頼母・新兵衛・五平次差添、中ノ口迄差出し、左之通書付ヲ以、五郎左衛門へ直ニ相渡候、御徒目付伴勘七・窪田忠蔵罷出ル、

覚

寛文御朱印写入御長持 一棹 棒共

貞享御朱印写入御長持 一棹 棒共

正徳御朱印写入御長持 六棹 棒共

右、伊予守殿被仰渡候ニ付、御渡申候、以上、

深見新兵衛

六月廿日

川口頼母

中山五郎左衛門殿

右ニ付、五郎左衛門よりも請取書、左之通、

寛文貞享正徳迄之

御代々 御朱印写入御長持、都合八棹、各封印之俣預置、平川口渡御櫓江入置申候、御用之節者、御徒目付立合を以相渡可申候、以上、

巳六月廿日

中山五郎左衛門

深見新兵衛殿

川口頼母殿

右、相渡候段、左之通御届書、佐渡守殿江長玄ヲ以差出之、但、最初伺被進故、佐渡守殿へ出之、

(付箋) 御朱印御長持 棹件

寛文四年

貞享元年

正徳三年

右、御朱印写入御長持八棹、今日、御目付中山五郎左衛門江相渡申候、依之申上候、以上、

六月廿日

御書物奉行

右、五郎左衛門より差越候請取書付、此方より遣し候書付之旨并御届書扣共、一所ニ封し候而、右号御筆箆へ入置候、

(中略)

一、今日差出候御朱印御長持八棹之鍵八本、只今迄右号筆箆ニ在之候処、今日相改、一包ニして紙長持之内鍵箱江納置之、³¹⁾

すなわち、今朝5時半時(午前9時頃)に御朱印御長持を、書物奉行の川口頼母、深見新兵

31)「御書物方日記」寛延2年(1749)6月20日条。

衛、大岡五平次が付き添って、中ノ口³²⁾まで持っていき、目付の中山五郎左衛門へ受け渡し物を記した書付を直接渡した。書付の記載によれば、この時引き渡された御朱印写入御長持は、寛文（4代家綱）、貞享（5代綱吉）、正徳（6代家宣）のものであるという³³⁾。また書付を渡した際、五郎左衛門からも請取書を渡された。その請取書によれば、代々の御朱印写が入った長持8棹は、平川口渡御櫓へ納めたという。今後利用する際は徒目付の立合いのもと、引き渡す旨が記されている。目付への引き渡しが無事完了した後、その旨を佐渡守（若年寄・板倉勝清）へ書付をもって報告した。そして、五郎左衛門からの請取書、こちらから渡した書付の旨ならびに（若年寄への）届書の控えをひとまとめにして封し、右号の筆筒へ入れ置いたとある。また長持の鍵は鍵箱に納めたとあり、御朱印写の鍵は書物方で預かっていたようだ。

以上が御朱印写入御長持の櫓への移管に係わる事務手続きの過程である。最初に示した通り、①若年寄に移管を上申→②若年寄から許可が下りる→③具体的な手順について目付と相談→④目付へ引き渡す（この後、目付方により櫓へ移管される）→⑤若年寄へ引き渡した旨を報告、という事務手続きの流れが確認できたかと思う。前にも述べたが、これ以降の明和4年（1767）、寛政2年（1790）の移管は、この寛延2年（1749）の移管の例に則って手続きが進められていくことになる。

ところで、櫓へ移管された御朱印写と書物蔵に残された御朱印写についても考察しておきたい。今回櫓へ移管された御朱印写は、寛文（4代家綱）、貞享（5代綱吉）、正徳（6代家宣）である。一方、書物蔵に残された御朱印写は、最初に取り上げた伺の史料により、延享（9代家重）の御朱印写が文庫に新たに預けられることになった事実がわかっている。また、享保（8代吉宗）の御朱印写は、享保4年（1719）9月に文庫に預けられたという記録が「御書物方日記」に残されている³⁴⁾。寛延2年（1749）時点での将軍が9代家重であることから、当代（延享・家重）と前代（享保・吉宗）の御朱印写は文庫で保管され、それ以前（寛文・4代家綱、貞享・5代綱吉、正徳・6代家宣）のものは櫓へ移管されたことになる。ちなみに、8代吉宗の領知宛行状の印知年月日は、大名領が享保2年（1717）8月11日、寺社領が享保3年（1718）7月11日、公家領が享保4年（1719）5月21日であることから、長いもので2年後、短いもので数か月後に文庫へ預けられている。

さて、以降の明和4年（1767）、寛政2年（1790）の御朱印写の櫓への移管は、寛延2年（1749）の移管手続きと同様の過程を辿るため、表1に基づいた簡単な解説に留め、詳細に検

32) 中ノ口は江戸城本丸表向の東側にある。中ノ口門から中ノ口に至る通路の両側には、諸役人（老中、若年寄、大目付、目付、三奉行、奏者番等）の控室ともいべき下部屋が存在する。諸役人は登城すると、まずこの部屋に入り、衣服を着替えたり、身なりを整えたりしていたという（深井雅海『図解・江戸城をよむ』原書房、2003〔第3刷〕年、66頁）。

33) 領知宛行状の発給の時期を考慮すると、「寛文」は4代家綱、「貞享」は5代綱吉、「正徳」は6代家宣の御朱印写入御長持であると推定できる。7代家継は領知宛行状を発給する前に死去しているのので、「正徳」は6代家宣のものと考えられる。

34) 「御書物方日記」宝暦11年（1761）9月10日条には、享保4年（1719）9月に享保度の大名領、公家領、寺社領、計6棹が預けられたという記載がある。また享保4年の日記によると、7月13日に「御判物御朱印之写等入候長持一棹」、9月1日に「御先判之写入候御長持五棹」が文庫に預けられている。これらが享保の御朱印写であると推察されるが、やや疑問もある。享保4年9月の日記はほとんど記載がないため、記載のない日に享保の御朱印写が預けられた可能性は否定できない。いずれにせよ、享保4年9月には享保の御朱印写が文庫に預けられたと考えてよさそう。

討することはしない。ただ、文庫の書物蔵にある御朱印写と、櫓へ移管される御朱印写が何代將軍のものであるのか、前代以前の將軍の御朱印写に対する認識を確認するために、両者の伺書の記事を取り上げて、以後の移管実態を検討する。

ではまず、明和4年(1767)の移管に関する史料を見ていく。次に挙げるのは、明和4年2月2日に書物奉行から若年寄へ提出された伺書の記事である。

一、享保延享 御朱印写入御長持都合十二棹、御蔵余席無之候ニ付、左之通相認、御用番 信濃守殿江橋本喜八郎ヲ以差出之、

袖ニ 享保延享御朱印写入御長持之伺書付 御書物奉行

享保御朱印写入御長持 六棹

延享御朱印写入御長持 六棹

右、御長持拾貳棹

御先代 御朱印写入御長持二而御座候、御書物蔵余席無御座候、寛延二巳年五月伺之上、御代々 御朱印写入御長持之内、享保之度 御朱印写入御長持斗残し置、寛文貞享正徳迄之 御朱印写入御長持都合八棹、御目付中山五郎左衛門江相渡、平川口渡り御櫓江納置被申旨、同年六月被仰渡、私共封印仕相納置申候、然ニ去ル申年、当御代 御朱印写入御長持七棹、御預ケニ罷成、又々御蔵余席無御座候ニ付、上規之通、宝暦 御朱印写入御長持斗相残し置、右享保延享御長持拾貳棹、平川口渡り御櫓之内江一所ニ相納置申度、奉伺候、以上、

二月二日

御書物奉行³⁵⁾

すなわち、享保延享御朱印写入御長持、合わせて12棹について、書物蔵に保存できる場所がないため、寛延2年(1749)の先例に基づき、平川口渡御櫓へ納めたい旨を記した伺書を御用番の信濃守(若年寄・小出英持〔英智〕)に提出した。なぜ保存場所が無くなったかということ、当御代(宝暦・10代家治)の御朱印写を入れた長持7棹が新規に書物蔵に預けられることになったからであるという。蔵には宝暦の御朱印写入御長持のみを残し、享保・延享のものは平川口渡御櫓へ納めたいと記されている。

それでは、史料中に登場する御朱印写について検討する。移管される予定の御朱印写は、享保と延享の御朱印写入御長持12棹なので、8代吉宗と9代家重のものである。そして、明和4年(1767)時点の將軍は10代家治であることから、史料中の「当御代御朱印写入御長持七棹」は家治のものであることがわかる。ちなみに、史料の「宝暦御朱印写入御長持」は「当御代(家治)」と同一のものを指す。この伺は、伺の通り受理されたことから、今回の移管では、当代の家治の御朱印写のみを残し、前代(延享・9代家重)と前々代(享保・8代吉宗)の御朱印写は櫓へ移管されたことがわかる。また、当御代の御朱印写(宝暦・10代家治)は「去ル申年」に預けられたとの記載から、宝暦14年(明和元年)(1764)に新規に預けられたという事実も看取できる³⁶⁾。10代家治の領知宛行状の印知年月日は、大名領が宝暦11年(1761)10月21

35)「御書物方日記」明和4年(1767)2月2日条。史料中の橋本喜八郎は奥右筆組頭。

36) 宝暦14年(1764)5月25日に「宝暦十四年万石以上御朱印写入御長持壹棹」が、明和元年(1764)6月10日に「宝暦度堂上方御門跡御比丘尼方御朱印御長持壹棹」と「宝暦度寺社領御朱印御長持五棹」が文庫へ移管されている(「御書物方日記」)。なお、宝暦14年6月2日に宝暦から明和へと改元されている。

日、公家領および寺社領が宝暦12年（1762）8月11日であることから、領知宛行状発給後2～3年で御朱印写が文庫に預けられていることがわかる。

さて、次にこの後の手続き過程であるが、同日の記載を見ると、この伺は即日受理され、信濃守（若年寄・小出英持）から移管の許可が下りている。同月9日には目付の室賀源七郎と対談し、引き渡しの期日は明後11日と決まる。当日11日、御朱印写入御長持を目付へ引き渡した後、その旨を若年寄の小出信濃守へ報告している。

この時の移管に関わる一連の流れは、寛延2年（1749）の例と全く同じであり、最初に提示した①～⑤の過程を辿って移管されていることがわかる。また、寛延2年時には伺から移管まで1か月ほど要していたが、今回は伺から移管までの期間が9日である。先例があることにより、初めての事例よりも手続きが迅速に行われている様子が窺える。

最後に、寛政2年（1790）の移管に関する史料を検討したい。次に挙げるのは、寛政2年6月11日に書物奉行から大膳亮（若年寄・青山幸完）へ提出された、櫓への移管についての伺書である。

宝暦度御朱印写入御長持之儀申上候書付

此度

御判物

御朱印之写可相納旨、松平右京亮・西尾隠岐守申上候、其段丹波守殿被 仰渡候、然所、御蔵一棟損候付、先達而より御修復之儀申上置候間、右御蔵納候御品之分、外御蔵二棟江積込置、御蔵内余席無御座候間、只今迄御蔵ニ相納り有之候宝暦度

御判物

御朱印之写入御長持七棹、先例之通、平川口渡御櫓江相納申度奉存候、此段奉伺候、以上、

六月

御書物奉行

享保延享御朱印写入御長持

拾貳棹

右、明和四亥年二月奉伺、平川口渡御櫓江相納申候、右者、宝暦度御朱印写入御長持、新規御預ニ相成候上、享保延享度御長持奉伺、平川口渡御櫓江相納申候得共、此度者御蔵御修復之儀申上置候、別而余席無御座候ニ付、書面之通申上候、³⁷⁾

この度も新たに御判物と御朱印の写が文庫に納められることになったが、書物蔵の保管場所に余裕がない。そのため、これまで蔵に納めていた宝暦度（10代家治）の御判物御朱印写入御長持7棹を、先例の通り、平川口渡御櫓へ納めたいという旨が記されている。また今回は、御朱印写入御長持が新たに書物蔵に納められるだけでなく、蔵の修復も重なったため、さらに保管場所に余裕がなくなっている状況が窺える。そして伺書の末尾に、明和4年（1767）の享保延享御朱印写入御長持の移管の伺が先例として取り上げられている。

この時、新規に預けられる「御判物御朱印之写」は当代の將軍である11代家斉のものである。同月の記事を見ると、10日および23日に寛政（天明）の御朱印写が文庫へ預けられていること

37)「御書物方日記」寛政2年（1790）6月11日条。史料中の松平右京亮は寺社奉行・松平輝和、西尾隠岐守は奏者番・西尾忠移、丹波守は老中・烏居忠意である。

から、この時の御朱印写入御長持は11代家斉のものと判断できる³⁸⁾。11代家斉の領知宛行状の印知年月日は、大名領が天明8年(1788)3月5日、公家領および寺社領が同年9月11日であることから、領知宛行状発給からおよそ2年後には、写が文庫へ預けられているといえる。そして、この伺書も伺の通り受理されるので、当代家斉(寛政)の御朱印写のみを書物蔵に残し、前代家治(宝暦)の御朱印写は櫓へ移管されることになった。

以後の経過は、まず同月18日に若年寄の青山大膳亮より許可が下りる。翌19日に目付の神保喜内と面談し、引き渡し期日が明後21日と決まる。引き渡し当日21日には、宝暦度御朱印写入御長持7棹を目付へ引き渡し、その後、大膳亮に引き渡しの旨を報告して、一連の作業が完了している。この時も、以前の移管と同じように、最初に提示した①～⑤の過程で移管が行われている。

以上、御朱印写入御長持の櫓への移管に関わる一連の過程を、寛延2年(1749)の事例を中心に検討し、その事務手続きの流れを明らかにした。最初に示したように、御朱印写の移管にあたっては、①若年寄に移管を上申→②若年寄から許可が下りる→③具体的な手順について目付と相談→④目付へ引き渡す(この後、目付方により櫓へ移管される)→⑤若年寄へ引き渡した旨を報告、という5段階の過程が存在する。また、②若年寄の許可が下りた後、④目付へ引き渡すまでの間に、書物奉行全員の連印をもって、長持を封印する必要があることも明らかとなった。

ところで、御朱印写の引き渡し場所となった移管先である「平川口渡御櫓」についても検討しておきたい。平川口渡御櫓は平川門近くの渡櫓(多聞櫓)のことである。平川門は三丸の正門にあたり、江戸城本丸からみて北東の方向にある。文庫のある紅葉山は本丸の南西の方角なので、平川門と文庫は本丸を挟んで正反対に位置する。平川門は大奥女中の通用門であると同時に、別名不浄門ともいわれ、城中の死人・罪人を送り出すところでもあった³⁹⁾。櫓への移管後も御朱印写入御長持の管理自体は書物方が担っていたが、平川口渡御櫓の管理は目付が行っていたことから⁴⁰⁾、書物方も差出等の御用がない限りは立ち入らなかった。目付方でも、定期的な確認や風干はしていなかったようで、長持の封印が朽ち損じるという出来事もあった⁴¹⁾。櫓での保管は、書物蔵に比べ管理体制が整っているとは言い難い状況が見て取れる。このような実態から考えると、移管された御朱印写は、保管する必要があるにせよ、作成当初に比べれば文書の重要性は低下しているといえる。ただし、平川口渡御櫓に移管した御朱印写が利用される事例もあるので、まったく非現用文書になったわけではない⁴²⁾。平川口渡御櫓が御朱印写

38) 寛政2年(1790)6月10日に「寛政二年万石以上御朱印写入御長持七棹」、同月23日に「堂上方并寺社領御判物御朱印写入御長持五棹」が文庫へ預けられている(『御書物方日記』)。

39) 下野寛介「平川門」(大石学編『江戸幕府大事典』吉川弘文館、2009年、537～538頁)。

40) 櫓への移管の際の引き渡し相手が目付であることや、その後の利用の際には徒目付が立ち会うことから判断できる(寛延2年(1749)6月20日条)。

41) 明和5年(1768)7月、平川口渡御櫓の修復にあたり、御朱印写入御長持を一時的に三之丸渡御櫓へ移し替えることになった。その際、書物奉行は目付から長持の封印が朽ち損じているとの報告を受け、目付の案内で三之丸渡御櫓まで見分に行っている。この出来事から、櫓への移管後、書物方による保管状況の確認は行われておらず、目付方でも定期的な確認や風干は行っていなかったと判断される(『御書物方日記』明和5年(1768)7月13日、16日、17日条)。

42) 『御書物方日記』天明7年(1787)6月3日条、同4日条。

の保管先として選定された理由は不明だが、おそらく空間に余裕があったためであろう。

また検討しておくべき問題として、文庫の書物蔵にあるものと、櫓へ移管されるものが何代將軍の御朱印写なのか、ということがある。寛延2年（1749）の最初の移管の際には、当代（延享・9代家重）と前代（享保・8代吉宗）の御朱印写は書物蔵で保管され、それ以前（寛文・4代家綱、貞享・5代綱吉、正徳・6代家宣）のものは櫓へ移管された。その後、明和4年（1767）には、当代（宝暦・10代家治）の御朱印写のみを残し、前代（延享・9代家重）と前々代（享保・8代吉宗）のものは櫓へ移管されている。そして寛政2年（1790）の段階では、当代（寛政〈天明〉・11代家斉）の御朱印写を残して、前代（宝暦・10代家治）のものは櫓へ移管された。ここから、最初の寛延2年を除いて、当代のみを書物蔵に保管し、前代以前は櫓へ移管していることがわかる。寛延2年（1749）と、明和4年（1767）および寛政2年（1790）の違いとして、寛延2年時には前將軍の吉宗が生存していたが、明和4年、寛政2年時には前將軍はすでに死去していたという点が挙げられる。おそらく寛延2年時には前代の吉宗が生存していたため、櫓への移管を保留したのではなかろうか。加えて、時代が下るに従い、書物が増え、蔵内の保存場所が限られていったという実態もあろう。いずれにせよ、明和4年以降は、当代の御朱印写を文庫の書物蔵で保管し、前代以前は蔵内の保存場所が確保できなくなった段階で、櫓へ移管されていたと考えられる。また折に触れて取り上げたが、御朱印写は、領知宛行状発給後、数か月～3年後に文庫へ納められている事実も明らかとなった。

以上、御朱印写の櫓への移管について、移管の事務手続き過程を明らかにした後、移管先および文庫に保管された御朱印写について考察した。その結果、①御朱印写は、領知宛行状発給後、数か月～3年で文庫へ納められること、②書物蔵に新規の御朱印写が預けられ、保管場所に余裕が無くなると、前代以前の御朱印写を順次櫓へ移管するというシステムが寛延2年（1749）以降に確立すること、などが明らかとなった。

3. 「御朱印写」の風干と書物方の権限

ここでは、御朱印写の風干の検討と、そこから見える書物方の御朱印写に対する権限について考察する。文庫では頻繁に書物の風干（風入、虫干）を行っていた。御朱印写についてもその例外ではなく、定期的に風干が行われ、大切に管理されていた。ただし、貞享（5代綱吉）、正徳（6代家宣）の御朱印写に関しては文庫への預入後、封切、風干された形跡がない。一方、寛文（4代家綱）については、御用のため、書物奉行によって数回、封切が行われており、風干も不定期に2回なされている⁴³⁾。定期的に風干が施されるようになるのは、享保20年（1735）以降である。この時、享保（8代吉宗）の御朱印写入御長持6棹が風干され、以後、3、4年に1度ずつ風干するよう指示が出された。以降はこの時の指示に基づき、定期的に風干が行われる。今回は、後の先例ともなる享保20年の風干を中心に検討していきたい。

まず、風干の伺が提出された享保20年6月17日の記事を挙げる。

一、御条目・御法令之御箱壺つ、御朱印写入候御長持十四棹共、御風入伺之書付并御封印

43) 『幕府書物方日記』享保元年（1716）7月20日条、同20年（1735）3月16日条、同年6月26日条。

之次第書付、都合式通、新兵衛罷出、圓貞ヲ以隠岐守殿江差上ヶ候処、御請取被成候由、圓貞申候、右伺書之扣、右号ニ入置候、⁴⁴⁾

御条目・御法令之箱(武家諸法度)1つと御朱印写入候御長持14棹⁴⁵⁾の風入伺の書付、および封印の次第書付(御朱印写入御長持の封印は老中が行うべきかを問うたもの)の2通を、新兵衛(書物奉行・深見新兵衛)が隠岐守(若年寄・西尾忠直〈忠尚〉)へ提出したことが記されている。風干の伺も、櫓移管の際と同様、伺書を提出するのは若年寄のようである。これは書物奉行が若年寄支配に属するためだろう。

そして同月25日には、伺に対する回答が書物奉行に伝えられた。その史料を次に挙げる。

一、隠岐守殿御用有之由、蜷川八右衛門口上ニ而申来、即刻罷出候処、此間伺置候

御朱印御長持之内、享保四年之分六棹御風入可有之候間、明後廿七日四時 御殿江差上可申旨、且又、寛文四年之御長持一棹、伺之通、御老中御封印ニ御改可被成候間、是亦差添可出旨、隠岐守殿、以八右衛門被仰渡候、尤、明後廿七日、拙者外出いたし差上可申候、且又、御条目等入候御箱之義ハ、不及御沙汰候、尤、右之外七棹之御長持も御風入之御沙汰無之由、八右衛門申聞候、⁴⁶⁾

すなわち、この間、伺を提出した御朱印御長持のうち、享保4年(1719)の分6棹を風入せよとのことで、明後27日4時(午前10時頃)に御殿へ差し出すようにと伝えられた。また、寛文4年(1664)の長持1棹は老中封印にするので差し添えること、御条目等入候御箱と他7棹(御朱印写入御長持)は風入の必要は無しとのことだった。注目すべき点としては、①御条目・御法令箱と御朱印写入御長持14棹の風入の伺に対し、沙汰が下りたのは、享保4年分6棹のみであったこと、②寛文4年の長持は老中封印になったこと、2点が挙げられよう。

そして、風干当日27日の記事を次に示す。

一、今朝五ッ時過、寛文四年御朱印長持壹棹・享保四年御朱印長持六棹、中之口へ相廻シ、蜷川八右衛門江相渡シ候処ニ、寛文四年ノ御長持、只今迄御書物奉行封印いたし来候得共、今度伺ニ付、中務太輔殿御封印ニ罷成、即刻下り申候、右御封印、八右衛門持参、改付替候、木札も新規ニ付申候、木札・御封印之所樟腦入つゝませ、新御蔵へ納之、新兵衛殿之元印ハ、さき捨申候、

一、享保四年御長持六棹、今日、於御数寄や御風干有之候由、阿の方ニ而樟腦入、是又、中務太輔殿御封印付、木札改り、八ッ時過八右衛門被相渡候、請取、銘々御封印・木札樟腦入包ませ、新御蔵江納之、

一、右之節、八右衛門被申聞候者、隠岐守殿今日被仰候者、寛文已来正徳年中之御長持ハ御沙汰ニ及び不申候得共、今日上り候享保四年六棹之御長持者、已来共御風干之儀より伺可然思召候、尤、年々伺御風干有之義にて者無御座候、三四年ニ一度ッ、も伺候ハ、可然由、八右衛門より申達候様ニ被仰之由、

一、右享保四年御長持、壹棹者鑰壹ッ別封有之、五棹者鑰四ッニ而明キ申候由、内壹ッ兼

44)『幕府書物方日記』享保20年(1735)6月17日条。

45) 内訳は寛文・貞享・正徳ものが8棹、享保ものが6棹である。前節、御朱印写の櫓への移管について述べた際に提示した史料から、寛文・貞享・正徳が計8棹、享保が6棹ということが分かっている(『御書物方日記』寛延2年(1749)5月22日条、同年6月20日条)。

46)『幕府書物方日記』享保20年(1735)6月25日条。

而折かゝり有之候故、今日直ニ八右衛門留置、近日御細工所ニ而直させ、追而可遣候由、依之、今日者四ッ之内三ッ請取申候、鎗之包紙之上ニも、其段断書いたし置候、右鎗共、先右号筆筭江入置候、⁴⁷⁾

これらの記事の中で重要な点としては、①指示のあった寛文4年（1664）の長持だけではなく、享保4年（1719）の長持も老中が封印していること、②享保の御朱印写は3、4年に1度風干を行うよう指示されたこと、③御朱印写は数寄屋において風干されたこと、以上の3点であろう。

まず①に関して、これ以降の御朱印写の風干の際には、長持に老中の封印が施されている。このことから、おそらくこの時、御朱印写入御長持の封印者は、書物奉行から老中に切り替わったと想像される。ただし、これは風干の際の原則であって、長持の預入の際には適用されない。御朱印写入御長持の預入の際には、基本的に朱印改めの担当者である寺社奉行と奏者番の名で封印されている。

次に②であるが、享保以外の御朱印写（寛文・貞享・正徳）は今回風干の対象となっておらず、またその後、3、4年に1度の風干指示もないことから、当代（享保・8代吉宗）の御朱印写以外は管理の対象から外されていることが窺える。古い御朱印写が不要というわけではないのだろうが、少なくとも重要なものとしては捉えられていないといえよう。

最後に③について、数寄屋は江戸城本丸の白書院の西側に位置する茶室である⁴⁸⁾。この日、書物方には「御数寄屋」で御朱印写が風干されたとの情報がもたらされた。しかし、実際には「御黒書院南御縁頼溜り之間竹之御廊下通」で風干されていたことが、元文3年（1738）の日記に記されている⁴⁹⁾。黒書院は儀礼を行う場であり、享保（8代將軍吉宗）以降には、万石以上の大名への領知宛行状の下賜は黒書院で行われていた⁵⁰⁾。この事実と風干の場との関係は無関係ではなかろう。このように、文書と風干の場との関わりも追及していくべき問題であるが、その点は今後の課題としたい。

さて、享保20年（1735）以降、享保の御朱印写は、3、4年に1度ずつ風干が行われるが、明和2年（1765）に一つの転機が訪れる。それは、前代以前の御朱印写の風干を止め、当代の御朱印写のみを風干したい旨の伺書が提出されたことに始まる。当代と前代以前の御朱印写の取り扱いの違いを検討するため、その伺書を取り上げる。

享保年中御朱印写入御長持、三四年ニ壹度ッ、御風干仕、延享宝暦御朱印写入御長持ハ御沙汰無御座候、先年より順送りニ御風干仕候様奉存候間、外者相止メ、宝暦御朱印写入御長持斗、来戊年より三四年ニ一度ッ、御風干相伺可申哉、奉伺候、以上、

47) 『幕府書物方日記』享保20年（1735）6月27日条。史料中の蛭川八右衛門は奥右筆組頭、中務太輔は老中・本多忠良。なお、翻刻史料に誤植があったため、原史料に基づき訂正した。

48) 一般に数寄屋は茶室を意味する。数寄屋造、数寄屋風書院造ともいわれ、近世住宅で茶室建築の意匠を取り入れた建物を指す。江戸城の数寄屋には、数寄屋坊主が詰めており、数寄屋頭の支配のもと、茶の調達や茶道具の保管、黒書院の管理・清掃などを行っていた。

49) 『幕府書物方日記』元文3年（1738）6月14日条。数寄屋頭から渡された書付には、享保20年（1735）時の風干が「御黒書院南御縁頼溜り之間竹之御廊下通」でなされたことが記される。

50) 松平太郎著、進士慶幹校訂『校訂 江戸時代制度の研究』（柏書房、1966年、73～74頁）、藤實久美子「江戸時代中後期の領知判物・朱印および領知目録の授受儀礼」（『学習院大学史料館紀要』第13号、2005年3月）。なお、正徳時には白書院が用いられていた。

六月二日 御書物奉行⁵¹⁾

これは、明和2年6月2日に書物奉行から奥右筆組頭の清須孫之丞へ提出した伺書である。すなわち、享保年中の御朱印写入御長持は、3、4年に1度ずつ風干をしていたが、延享・宝暦の御朱印写入御長持はその指示がなかった。順番に風干をした方がよいので、他(享保・延享)は風干を止め、宝暦の御朱印写入御長持のみを来る戊年から3、4年に1度ずつ風干を伺うべきか、伺を立てた。この伺は1か所変更が生じたため、同月12日に再度伺書を提出している。変更があったのは、風干を始める時期で、2日の記事では、傍線部「来戊年より三四年ニ一度ッ、」となっていた箇所が、12日の伺では「当酉年より三四年ニ壹度ッ、」となっている⁵²⁾。12日の伺は、同月18日に信濃守(若年寄・小出英持)より伺の通りに実行するよう指示がある。

享保20年(1735)の指示により、享保の御朱印写は、3、4年に1度ずつ風干が行われてきた。しかし、延享・宝暦の御朱印写に関してはその指示がなかったため、風干をしていなかったらしい。そして10代家治の治世である明和2年(1765)に至って、享保・延享の御朱印写は風干を止め、宝暦の御朱印写のみを風干することが決まった。ここでも当代(宝暦・10代家治)の御朱印写以外は、管理の対象から外されていることがわかる。前代以前の御朱印写は、保存の対象ではあっても、定期的な風干を行うほど大切に管理すべきものではなくなっていくという実態が窺える。これ以降、宝暦の御朱印写は定期的に風干が施される。日記を確認したところ、少なくとも寛政期頃までは3年に1度の割合で、7月頃に風干が行われている。

最後に、風干という作業に関連して、書物方が御朱印写の管理に際し、どの程度の権限を有していたかを示す興味深い史料がある。

一、今日御殿江出居候処、丹波守殿御用有之候由、奥江相廻り候様、御目付神保喜内申聞候間、直二陰時計江相廻り申込候処、奥御右筆肥田十郎兵衛申聞候者、此間被差上候御朱印御長持之内、御判物等無之、何れ之御長持ニ有之候哉与被相尋候間、右御長持之儀者御老中方御封印二而、御風入之節者、於御黒木書院、各方御取扱被成、御封印之俣受取相納置候間、内之儀者一向存不申候旨挨拶致候、左候ハ、申請候而御蔵江罷越候義も可有之旨申聞候、尤、前日ニも其段可申遣旨、十郎兵衛申聞候、⁵³⁾

これは「御書物方日記」の天明7年(1787)正月29日の記事である。3日前の26日に丹波守(老中・鳥居忠意)が御用のため、「宝暦一〇辰年万石以上御朱印写御長持一棹」を文庫より借り出していた⁵⁴⁾。その借り出した長持に関する質問が奥右筆肥田十郎兵衛を介してなされ、書物奉行が応対しているという場面である。肥田十郎兵衛は書物奉行に対し、この間受け取った御朱印御長持の内、御判物等が無かったが、どの長持に入っているのかと問うた。書物奉行の

51) 「御書物方日記」明和2年(1765)6月2日条。

52) 「御書物方日記」明和2年(1765)6月12日条。2日と12日の伺の大きな変更点は風干を始める時期のみであり、それを除けば文意に相違はないものの、2つの伺は文言等が若干異なる。

53) 「御書物方日記」天明7年(1787)1月29日条。

54) 「御書物方日記」天明7年(1787)1月26日条。天明6年(1786)9月8日に10代將軍家治が死去し、翌天明7年4月15日に11代將軍家斉が將軍宣下を受けている。また老中鳥居丹波守忠意は朱印改めの総責任者であることから、この時の宝暦御朱印写入御長持の借出は、家斉の領知宛行状発給の準備に関わるものであると推察される。

回答は、長持は老中方が封印しており、風入の節は御黒木書院（黒書院）においてあなた方（奥右筆）が取り扱われ、封印のまま受け取って蔵に納めるので、長持の中身は全く存じていないと述べている。

史料から、書物方では封印された状態の長持を受け取って蔵に保管しており、封印を解いて風干を行う、あるいは中身を調査する等の権限は持っていなかったことがわかる。文庫で管理している書物ならば、通常は書物方で風干を行い、調査事項があれば、書物方で中身を調査して報告するので、文庫の書物と他所から預かっている文書である御朱印写は明らかに別の扱いがなされていたといえる。書物方では、御朱印写の入った長持は管理するが、御朱印写という文書を管理する権限はなかった。それ故、『元治増補御書籍目録』では他の文庫の資料とは区別する形で、封印物之部として記載されたのである。

以上、御朱印写の風干と書物方の御朱印写に対する権限について検討した。それにより、①御朱印写は享保20年（1735）以降、3、4年に1度の割合で風干が定期的に施されるようになったこと、②基本的に当代の御朱印写のみが風干の対象であること、③書物方は蔵で御朱印写の入った長持を保管しているだけで、風干を行う、あるいは中身を調査する権限は有していなかったこと、などが明らかになった。

おわりに

本稿では、紅葉山文庫における幕府文書（幕府が作成した文書や記録類）の管理体制を明らかにするべく、幕府文書の中でも特に領知宛行状の写である「御朱印写」に着目して考察した。紅葉山文庫は、これまで主に図書館学的な観点から研究される場合が多かったが、文庫は幕府文書を管理する役割も担っていた。しかし、その点に関する詳細な研究は存在しなかったことから、本稿では文庫における幕府文書の管理のあり方を明らかにすることを課題とした。具体的な検討に入るにあたり、紅葉山文庫では如何なる幕府文書が保管されていたのか、第1節において「御書物方日記」や文庫の目録の記載を取り上げて検討した。続く第2節、第3節では、御朱印写を事例に、その管理について、櫓への移管と風干に焦点を当て、文庫内での管理実態を考察した。第2節においては、御朱印写の櫓への移管の実態とその手続き過程を検討し、蔵内に保存場所がなくなると、当代の御朱印写のみを書物蔵に残し、前代以前のは順次櫓へ移管するというシステムが、寛延2年（1749）以降に確立することを示した。また検討を進める中で、御朱印写は、領知宛行状発給後、数か月～3年で文庫へ納められる事実も明らかになった。そして第3節では、御朱印写の風干について、書物方の権限という問題にも視野を広げて検討した。御朱印写を3、4年に1度ずつ風干する体制が享保20年（1735）以降に成立したこと、風干の対象は当代の将軍の御朱印写のみであったこと、書物方は御朱印写の入った長持を蔵で保管しているのみで、風干を行う、あるいは中身を調査するといった権限は有していなかったこと、などを明らかにした。

幕府の文書管理は、先学の研究により、老中、勘定所、寺社奉行、奏者番などについては徐々に明らかになりつつある⁵⁵⁾。それらの役職と比べて、紅葉山文庫の特徴的な点は、先学の

55) 註7参照。

研究でも指摘されている通り⁵⁶⁾、自所(書物方)が関わる文書だけでなく、他所から預けられた文書も保管しているという点が挙げられる。今回はそうした他所から預けられた文書の一つである「御朱印写」を取り上げて検討した。一事例のみの検討ではあったが、幕府の文書管理における文庫の機能を示すことができた。今後、御朱印写以外の文書類も検討することで、幕府の文書管理体制における紅葉山文庫の役割を、より明確に位置付けることができるだろう。

また、今回、櫓への移管や風干の過程を分析する中で、文庫における文書管理だけではなく、書物方と他の組織との関係も垣間見ることができたのではないか。本稿では、文書の管理体制や手続き過程を解明することに主眼を置いて検討したため、役職間との関係はほとんど言及できなかったが、取り上げた史料を通して、御朱印写と、その管理に関わる、書物奉行、老中、若年寄、奥右筆、目付、彼らの関係性や御朱印写に対する権限なども、断片的ながら知ることができたであろう。幕府の文書管理研究では、組織内部での文書管理からその組織の文書管理体制や組織構造をみる研究が多かったが、幕府や藩などの規模の大きな組織の文書管理体制や組織構造を明らかにする上では、他組織との関係も同時に追及していくべき課題であると思われる。

最後に、本稿で取り扱った御朱印写の明治以後のゆくえについて述べておきたい。本稿で取り扱った御朱印写は、おそらく現存していない。国立公文書館に「徳川家判物并朱黒印」として、2680通が保存されているが、これらは明治政府が幕府の発給した領知宛行状を回収したものの一部であるという⁵⁷⁾。したがって、紅葉山文庫に保管されていた御朱印写とは別物であり、当時、文庫や櫓に存在していた御朱印写は、すでに散逸してしまっている可能性が高いといえる。

本研究が今後の文書管理研究の発展に寄与するものであることを願い結びとしたい。

56) 註8参照。

57) 福井保「『徳川家判物并朱黒印』解題」(史籍研究会編『内閣文庫所蔵史籍叢刊 第82巻 徳川家判物并朱黒印(1)』汲古書院、1988年)。「徳川家判物并朱黒印」は、『内閣文庫所蔵史籍叢刊 第82～84巻 徳川家判物并朱黒印(1)～(3)』(汲古書院、1988年)として、影印本が刊行されている。